



TITLE:

皎然詩式の構造と理論

AUTHOR(S):

興膳, 宏

CITATION:

興膳, 宏. 皎然詩式の構造と理論. 中國文學報 1995, 50: 68-80

ISSUE DATE:

1995-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177583>

RIGHT:

皎然詩式の構造と理論

興膳

宏

京都大學

樓叢書本である。張少康氏の「皎然《詩式》版本新議」(『國學研究』第二卷、一九九四年)によれば、北京圖書館には、三種の明清五卷本『詩式』の抄本が藏されており、明の嘉靖初年にはすでに五卷本が流傳していたことが、その跋文から明らかであるという。現在の五卷本がどこまで遡れるかは、『詩式』研究の一つの課題といつてよい。

中唐の詩僧皎然(七二〇〜七九三)の『詩式』は、唐代の代表的な詩論として、今日なお中國文學理論史上に一定の位置を占めているが、嚴密なテクストクリティックに基づく本文は、いまだに確立されていない恨みがある^①。『詩式』には、五卷本と一卷本があり、兩者の内容にはかなりのちがいがあある。『新唐書』藝文志、『崇文總目』、『直齋書錄解題』、『宋史』藝文志など、宋元までの主要な書目では、すべて五卷の書として著録される。現行五卷本の「中序」には、皎然自ら「勒成五卷」と記しているので、この書が元來五卷であったことは確かなのだが、残念ながら宋本のよくな古い時期の版本はなく、いまもっぱら行なわれている五卷本は清の陸心源(一八三四〜一八九四)の刊行した十萬卷

もう一つの系統である一卷本は、『續百川學海』、『說郛』(百二十卷本)、『歷代詩話』等に收められているが、五卷本に比べてかなり項目数が減少しており、一種の簡本ともいふべき内容になっている。『四庫提要』集部詩文評類存目にも、やはり一卷の書として著録されている。但し『四庫提要』は、著者皎然が天寶・大曆間の人でありながら、引用される詩句が賀知章・李白・王昌齡など近い時代の詩人の作を交えることに疑いを懷き、「疑うらくは原書散佚せるに、好事者掇拾して之を補うなり」と述べて、一卷本がすでに本來の形態を失ったものであることを指摘している。いずれにせよ、五卷本も一卷本も、『詩式』の明以前の傳存状態が全く不明であるために、この書の原初の形とどの

ような關係にあるかについては、ほとんど手がかりが得られないというのが實狀である。

ところで、ここに第三のテキストともいうべき、もう一種の『詩式』がある。それは、宋・陳應行撰『吟窗雜錄』五十卷の卷八から卷十の半ばまでを占める『詩式』（以下、吟窗本と略稱する。『吟窗雜錄』は、内閣文庫藏明嘉靖四十年刊本を用いる）である。吟窗本『詩式』は、一卷本にはない多くの項目を有するとともに、各項目の内容はおおむね著しく簡略化されている。刊行年代が古いとはいえないながら、これが原『詩式』の形を傳えているとは到底いえない。しかし、『吟窗雜錄』に收載される他の詩論書、たとえば鍾嶸『詩品』や殷藩『河岳英靈集』などについても、同様の簡略化が共通して窺えるのであり、決して『詩式』だけに就いて不當な處遇がなされているというわけではない。ただ、そうした不備にもかかわらず、『吟窗雜錄』は他書にない貴重な佚文を収めていることも事實であり、また全書の輪郭を彷彿させるような手がかりをしばしば提供してくれるという利點もある。ここでも、吟窗本のそうした特色を生

かしつつ、『詩式』の原型を模索していきたい。

ところで『吟窗雜錄』には、皎然撰の詩論書として、『詩式』のほかに、『詩議』と題されるもう一種の書が卷七に收載されている。『詩議』の「評論」の項目を見ると、面白いことに、現行の五卷本・一卷本の『詩式』の内容と對應するところの多いことに氣がつく。さらに興味を引かれるのは、吟窗本の『詩式』と『詩議』の「評論」とが、ほぼ全ての項目にわたって、別表のように互いに補いあう關係にあるという事實である。兩者を合わせた項目數は、一卷本『詩式』を大きく上回って、五卷本の項目數にほぼ近く、またそれらの項目の名稱と内容は、五卷本・一卷本に共通して對應するところが多い。各項目の順序にしても、吟窗本『詩式』『詩議』それぞれの内部での排列が、現行本兩『詩式』での排列とほとんど食い違ふところのないことが注目される。もし吟窗本が『詩式』と『詩議』の古い形を暗示しているとすれば、現行の五卷本『詩式』は、本來の『詩式』と『詩議』を合わせて、皎然の「中序」や宋代の各書目にいうところの五卷本の形態に再編したものかも

卷	番號	五 卷 本 詩 式	一卷本詩式	吟窗本詩式	吟窗本詩議 (評論)	備 考
一	0	序	—	0	—	吟窗本作七至
	1	明勢	1	1	—	
	2	明作用	2	2	—	
	3	明四聲	3	3	—	
	4	詩有四不	4	4	—	
	5	詩有四深	5	5	—	
	6	詩有二要	6	6	—	
	7	詩有二廢	7	7	—	
	8	詩有四離	8	8	—	
	9	詩有六迷	9	9	—	
	10	詩有六至	10	10	—	詩議有一重意
	11	詩有七德	11	11	—	
	12	詩有五格	12	12	—	
	13	李少卿拜古詩十九首	13	—	4	
	14	鄭中集	14	—	5	
	15	文章宗旨	15	—	6	
	16	用事	16	—	7	
	17	語似用事義非用事	17	—	8	
	18	取境	18	—	9	
	19	重意詩例	19	—	10 a	
	a	二重意	—	—	10 b	詩議作詩有三 偷
	b	三重意	—	—	10 c	
	c	四重意	—	—	10 d	
	20	跌宕格三品	20	—	11	
	21	渥沒格一品	21	—	12	
	22	調笑格一品	22	—	13	
	23	對句不對句	23	—	—	
	24	三不同語意勢	24	—	14	
	a	偷語詩例	24 a	—	14 a	
	b	偷意詩例	24 b	—	14 b	
	c	偷勢詩例	24 c	—	14 c	
	25	品藻	25	—	15	吟窗本作不用 事爲第一格
	a	百葉芙蓉……例	—	—	15 a	
	b	龍行虎步……例	—	—	15 b	
	c	寒松病枝……例	—	—	15 c	吟窗本作不用 事爲第一格
	26	辨體有一十九字	26	13	—	
	27	中序	—	—	16	
	28	團扇二篇	—	—	17	
	29	不用事第一格	—	14	—	
	30	王仲宣七哀	—	—	18	
二	31	評曰古人於上格	—	—	19	吟窗本作作事 用格
	32	作用事第二格	—	15	—	
	33	三良詩	—	—	20	
	34	西北有浮雲	—	—	21	
	35	池塘生春草	—	—	22	
	36	律詩	—	16	—	
三	37	論盧藏用陳子昂集序	—	—	23	
	38	直用事第三格	—	17	—	
四	39	齊梁詩	—	—	24	
	40	有事無事第四格	—	18	—	
五	41	夫詩人造極之旨	—	—	—	
	42	復古	—	—	—	
	43	有事無事情格俱下第五格	—	19	—	
	44	立意總評	—	—	—	

洋數字は、關係各本における排列の順序を示す。

知れぬという想像も成り立つてであろう。そして一卷本は、恐らく原五卷本の主要な理論だけを摘んでまとめた簡本と見てよい。

では、『吟窗雜錄』が収める『詩議』とはいかなる書か。『詩議』を著録する書目としては、ただ一つ陳振孫『直齋書錄解題』があり、その卷二十二文史類に、『詩式』五卷と並列して『詩議』一卷の名が見え、その兩書の内容を概括して、「十九字を以て詩の體を括る」と記されている。『十九字』とは、表の26「辨體有一十九字」を指す。『詩式』以外の皎然の詩論書として、『新唐書』藝文志には『詩評』三卷が録される。同じ書が李肇『唐國史補』や辛文房『唐才子傳』にもやはり三卷として見え、鄭樵『通志』や『宋史』藝文志では一卷として著録されている。しかし、これが『詩議』と同一の書か否かについては、全く手がかりが得られない。

皎然に『詩議』と題する著作のあったことは、より古く空海『文鏡秘府論』に同書が引用されることによって知られる。同書東卷の「二十九種對」、すなわち二十九種類の

皎然詩式の構造と理論（興膳）

對句が列擧されるうちの、第十八隣近對から第二十五假對までの八種の對句は、「皎公詩議より出づ」と注記がある。この項は、そのまま吟窗本『詩議』に「詩有八種對」として見えている。また南卷「論文意」に、「或曰」として收められる十條の評論は、最初の三條（「夫詩有三四五六七言之別……」、「論人則康樂公秉獨善之資……」、「律家之流、拘而多忌……」）と6（「今人所以不及古者……」）・7（「詩不要苦思……」）・10（「又有評古詩……」）の三條がやはり吟窗本『詩議』に、六條相互の順序も全く同じ形で節録されている。（上記の項目番號は、拙著『文鏡秘府論』による。弘法大師空海全集第五卷、一九八六年、筑摩書房）してみれば、吟窗本『詩議』の排列はかなりの程度において、空海が據った唐代のテクストの名残をとどめていたと考えてよいのであるまいか。ただ、『詩式』と『詩議』との内容上の區別となると、羅根澤『中國文學批評史』二に、「詩議詩式都是皎然所作，相通的地方自然很多，但論其差別，則詩議偏于評議格律，詩式偏于提示品式」（四〇ページ）とあるような一應の見當をつけることは可能にしても、嚴密な一線を

兩者の間に引くことは困難である。

張少康氏の前提論文では、『詩式』の成立に關して一つの興味ある假説を提起している。『詩式』の「中序」及び『宋高僧傳』の皎然傳によれば、皎然はあるときふと「詩道は禪者の心に掛けるべきことではない」と悟って、執筆中だった『詩式』も、筆を斷つて書き繼がないことにした。それから五年ほどたったころ、たまたま前御史中丞の李洪に會ったとき、『詩式』のことに話が及び、その草本を見せたところ、李洪はひどく感嘆して、ぜひ世に出すようにと勧め、協力者として當地の文人吳季德なる人物を推薦した。そこで吳季德とともに改めて編録を行ない、五卷にまとめた。張氏は『詩式』に五卷本以前の「草本」のあったことに着目し、吟窗本はこの「草本」の系統を引くものではないかと考える。吟窗本に引用される歷代詩人の詩句は、二句一單位を基準とするのに對して、現行五卷本では、四句あるいは四句以上を一つの單位とするものが壓倒的に多い。前者は皎然が吳季德とともに手を加えて再編する以前の、より簡単な草稿の形を伝えるものであったかもしれない。

い。皎然自身は世に出すつもりはなかったこの「草本」が、彼の當時の名聲と地位と交友狀況から見て、傳わっていた可能性があり、吟窗本はその形を受け繼いでいるというのが張氏の見解である。

これは確かに面白い考えではあるが、定説とするにはなお問題がある。その理由の第一は、『吟窗雜錄』が收載する文中の引用句を減らしたり短くしたりするのは、すでに述べたように、『河岳英靈集』など他の書の場合にも頻出する常套的手段であつて、決して『詩式』に限らないからである。たとえば、卷二十七所收の『河岳英靈集』における常建と劉慎虛の詩句は、他本に比べてそれぞれ二句ずつ少なくなっている。ある書を『吟窗雜錄』に收載する場合、記事の項目數はそのままにして、各項目の記載内容を削減するのが、編者の一般的な方針だったように思われる。

また第二には、すでに見たように、吟窗本の『詩式』と『詩議』とが吻合して、現行五卷本『詩式』に對應する現象が、張氏の説では考慮に入れられていないことも問題である。前に擧げた『直齋書錄解題』では、「詩式五卷、

詩議一卷、唐皎然撰。以十九字括詩之體」とあって、あたかも兩書が一つのまとまりを成すかのような扱いをしていることに注意せねばなるまい。そこからさらに想像を広げれば、『吟窗雜錄』や『直齋書錄解題』の著わされた宋代にあっては、『詩式』と『詩議』の内容が混淆しあっている、明確な一線が引かれていなかったかもしれないのである。因みに五卷本の「中序」は、吟窗本『詩議』の中に含まれている。また宋・計有功『唐詩紀事』卷七十三に引かれる『詩式』には、偷語詩例・偷意詩例・偷勢詩例（三不同語意勢）、跌宕格二品、灑沒格一品、調笑格一品が收められており、現行本『詩式』24・20・21・22（數字は前表の番號）にも同じ項目が見いだせる。ところが『吟窗雜錄』では、これらはすべて『詩式』ではなく、『詩議』に所屬しているのである。こうして見ると、元來は別の著作であったはずの『詩式』と『詩議』とが、ある段階で混同され、のちの現行本『詩式』のような形で固定したと考えるのが合理的なように思える。

五卷本と一卷本との關係について、張少康氏は次のよう

皎然詩式の構造と理論（輿膳）

に述べる。「一卷本雖簡，却與五卷本爲同一版本系統，與吟窗本不同。不過，它只選五卷本第一卷中論詩歌創作基本方式的內容，突出其理論部分的意義與價值，和五卷本之強調品級等第不同。由此，不僅可以說明五卷本的可靠性，而且可以知道五卷本之較少流傳的原因。因爲五卷本的精華是在第一卷，不用事第一格“全面理論論述部分，其五等分類及舉例價值不大，且很繁瑣，而一卷本所選正是其精華部分，影響最大的也是這個本子。一卷本的廣泛流傳，必然使五卷本逐漸不爲人所知」。（前掲論文二三八ページ）

張氏の所説のごとく、一卷本『詩式』は、原本『詩式』の理論的精華を集約したものと見てよい。ただ、五卷本の一見いかにも繁瑣でくどくどしく見える部分、すなわち一卷本が割愛してしまった部分（實はそれが分量的には五卷本の大部分を占めるのだが）こそ、張氏もいわれるように本來の『詩式』の面目を成す中樞部ではなかったかということは、充分考慮しておくべきではないか。そうしたことを感じさせるのは、現行本『詩式』の構成があまり周到とはいいかねるからである。

二

一卷本にせよ、五卷本にせよ、1「明勢」から12「詩有五格」までは、項目の立てかたに一つの原則が窺える。冒頭の「明勢」「明作用」「明四聲」の各項は、それぞれ「勢」「作用」「四聲」という基本用語の解説であり、4以下の「詩有四不」「詩有四深」「詩有二要」「詩有二廢」「詩有二離」……は、「四不」「四深」「二要」「二廢」「二離」のごとく、數詞を冠した一種の名數を以て項目の名稱とし、詩作の基本的な心得を説いている。ところが13以後になると、「李少卿并古詩十九首」「鄴中集」「文章宗旨」「用事」「語似用事義非用事」といったぐあいに、個別の詩人論や創作技法論などさまざまな問題が、さほど前後の項目との連關性もなく並置されている。そのため『詩式』全體の構成に一貫性を缺くような印象を與える。

五卷本全體の構成を見渡すと、29「不用事第一格」、32「作用事第二格」、38「直用事第三格」、40「有事無事第四格」、43「有事無事情格俱下第五格」の五項目が、分量に

おいて最も多く、これらが全書の大部分を占めていることが分かる。そしてこの五項目は間を隔てて置かれてはいるが、名稱を一見しただけで、互いに關連しあっていることが明らかである。實は、それらを總括して各項目の概念を規定するのが、12「詩有五格」なのである。その内容を十萬卷樓叢書五卷本によって次に示しておこう。

不用事第一

作用事第二

其の事を用いざるも措意高からざる者は、黜けて第二格に入る。

直用事第三

其の中に亦た事を用いざるも格稍下るは、貶して第三に居く。

有事無事第四

第三格中に比して稍下る、故に第四に入る。

有事無事情格俱下第五

情格俱に下ること知る可きなり。

これは詩句の趣を五段階に分かつて評價するもので、不用事格を最高とし、以下順次評價が下がって、第五の「有事無事情格俱下」に至る。ここにいう「用事」とは、文中

には説明がないが、詩に典故を用いることを意味し、「不用事」とはその反對に典故を用いないことをいう。例えば、

『顏氏家訓』文章篇に、北齊の邢邵（子才）の語として、

「沈侯（沈約）の文章は、事を用いるに人をして覺らしめず、胸臆の語の若きなり」とあるのは、これと同じ用法である。皎然は典故を用いない、自然な趣の詩句を最も高く評價していたことが知られる。五種の格は、それぞれ古詩から唐代の詩人に至るまでの摘句から成っており、各種の格を體現した詩句を例示することによって、具體的にその詩趣を表出するという方法を用いている。『詩式』卷頭の序に、「今 兩漢已降、我が唐に至るまで、名篇麗句、凡そ若干篇、命づけて詩式と曰う」とあるように、『詩式』は元來こうした例句中心の構成をとっていたことを想像させる。

これら五種の項目は、一切の説明抜きで、すべて摘出された例句から構成される。例えば、「不用事第一格」の最初は次の通りである。

漢班婕妤云「出入君懷袖、搖動微風發。常恐秋節至、

涼飈奪炎熱」。情也。

蘇子卿詩「黃鵠一遠別、千里顧徘徊」。思也。

蔡伯喈詩「青青河畔草、綿綿思遠道」。又「客從遠方

來、遣我雙鯉魚。呼兒烹鯉魚、中有尺素書」。情也。又

「客從遠方來、橘柚垂華實」。意也。

古詩「冉冉孤生竹、結根泰山阿。與君爲新婚、兔絲附女蘿」。意也。

これらはいずれも典故を用いない自然な趣の句として推賞されている。それぞれの詩句の引用を見ると、第一格・第二格については、上記のごとく句の後に、必ず「氣也」「情也」「思也」「意也」「誠也」「達也」「德也」といった一字でその詩句の趣を概括した語が末尾に添えられている。その種類はすべて十九あり、皎然の理論において批評基準の核ともいえるべき重要な意味をもっている。これら十九字の概念規定を示すのが、26「辨體有一十九字」であり、その内容は以下のごとくである。

高 風韻切暢なるを高と曰う。

逸 體格閑放なるを逸と曰う。

貞 放詞正直なるを貞と曰う。

忠 危に臨んで變ぜざるを忠と曰う。

節 操を持して改めざるを節と曰う。

志 性を立てて改めざるを志と曰う。

氣 風情耿耿たるを氣と曰う。

情 景に緣りて盡きざるを情と曰う。

思 氣に含蓄多きを思と曰う。

德 詞は溫やかにして正しきを德と曰う。

誠 檢束防閑なるを誠と曰う。

閑 情性疎野なるを閑と曰う。

達 心迹曠誕なるを達と曰う。

悲 傷むこと甚だしきを悲と曰う。

怨 詞調悽切なるを怨と曰う。

意 言を立つるを意と曰う。

力 體裁勁健なるを力と曰う。

靜 松風動かず、林狹未だ鳴かざるが如きに非ず、乃

ち意中の靜かなるを曰う。

遠 渺渺として水を望み、杳杳として山を見るが如き

に非ず、乃ち意中の遠きを曰う。

先の「詩有五格」を皎然の詩論における縦糸とすれば、この「辨體有一十九字」はいわば横糸のような役割を擔うキイワードとなっている。『直齋書錄解題』には、王元撰と稱される『擬皎然十九字』一卷なる書が著録されるが、こうしたエピソードが現われたのも、『詩式』における十九字の役割の大きさを傍證するものといえよう。

もう一度、前掲の表に目を向けていただきたい。五卷本『詩式』が吟窗本『詩議』と一致する項目のうち、27「中序」はひとまず置くとして、その他の13「李少卿并古詩十九首」25「品藻」、28「團扇」、30「王仲宣七哀」、31「評曰古人於上格」、33「三良詩」37「論廬藏用陳子昂集序」、39「齊梁詩」を除いてしまうと、『詩式』の内容は、にわかに「不用事第一格」以下の例句中心の構成に收斂してゆくことに氣づくはずである。これは原『詩式』の形體を暗示するところがあるようだ。細部の問題點はひとまず置くとして、大きく見れば、『詩式』は本來「五格」と「十九字」を縦糸と横糸の原理として組み立てられた、例句中心

の評論書ということになるのではあるまいか。

三

『詩式』が例句中心の「五格」によって作詩法のありかたを示すことに主眼を置いた書だったとすれば、それは『詩品』に始まり唐代の詩論に引き繼がれて定着した詩論のありかたの一つ、すなわち秀句を摘出することによって詩を論ずるという手法に則っていたことになる。〔拙論「詩品から詩話へ」参照、『中國文學報』第四十七冊、一九九三年〕「五格」の排列は價值の序列を伴っているから、その意味でも『詩品』の後裔たる條件を備えているといつてよい。五種の品等法の規準になっているのは、典故の有無であり、いかえればことさらな技巧を排した自然の趣の尊重である。そうした考えは、10「詩有六至」の「至麗にして自然、至苦にして跡無し」や、6「詩有二要」の「力全くして苦澁ならざるを要す」などの條にも反映している。

このように皎然の詩論では自然さが重んぜられるが、しかしその自然さは、子どもの詩に見られるような生地のみ

まの素朴さと同じではない。18「取境」の中で、ある論者が「詩は修飾を假らず、其の醜朴に任す。但だ風韻正しく、天真全ければ、即ち上等と名づく」と主張するのに對して、「容を闕けども徳有り」という無鹽の女（『列女傳』）に見える齊宣王の妻鍾離春よりも、「容有りてしかも徳有る」周文王の妻太姒の方が勝ると反駁する考えにそれがよく窺える。そこではまた「詩境」すなわち詩的形象を選び取る際には、「苦思するを要せず、苦思すれば則ち自然の質を喪う」という對論者の論にも反對して、「取境の時には、須らく至難、至險にして、始めて奇句を見る」と述べている。それをさらに説明すれば、「篇を成せし後に、其の氣貌を觀るに、等閑にして思わずして得るが似き有り、此れ高手なり」ということになる。つまり詩作のために苦心しないのではなく、さんざん苦心を重ねながら、その跡が表立たず、さりげなく自然な形で作品に表われているのがよいのである。

「取境」ではさらに、「時有りて意靜かに神王^{さか}んに、佳句縱横にして、遏^{とど}む可からざるが若く、宛ら神助の若し」

といった、詩想湧くがごとく溢れ出る時期のあることを認めつつも、むしろ思考作用の停滞した状況を想定して、それいかに對處するかについての提言をこそ重んじている。皎然によれば、「先ず精思を積み、神王んなるに因りて得る」、すなわち熟慮を重ねて、精神のはたらきを活潑にし、そこから佳句を得るように心がけることこそが肝心なのである。

この「取境」の後半部と同じ主張が、『文鏡秘府論』南卷に引かれる『詩議』にも見られる。

或ひと曰く、詩は苦思を要せず、苦思すれば則ち天眞を喪うと。此れ甚だ然らず。固より須らく慮を險中より釋き、奇を象外に採り、飛動の句を狀り、冥奥の思いを寫すべし。夫れ希世の珠は、必ず驪龍の領に出づ、況や通幽含變の文をや。但だ章を成して以後は、其の易き貌有り、思わずして得たるが若きを貴ぶなり。このあと『詩議』は、「易きに似て到り難きの例」として、『古詩十九首』の「行行重行行、與君生別離」を擧げている。この句は『詩式』の「不用事第一格」にも、もちろん

代表的な秀句として擧出されている。

こうした自然さの尊重は、ひとり典故の使用に關してのみ主張されているのではない。詩作の重要な技法の一つである對句についても、それがことさらに技巧をてらった形にならないような、自然な使いかたが推賞されている。やはり『文鏡秘府論』所收の『詩議』に、「但だ古人は語を後にし、意を先にす。意に因りて語を成し、語は意を使わず、偶たま對すれば則ち對し、偶たま散ずれば則ち散ず。若し力めて之を爲せば、則ち斤斧の跡を見る」とあるのは、その考えを端的に示すものである。だから『詩式』の「鄴中集」の項で劉楨の詩を評して、「對屬に拘とどまず、偶たま或いは之有り」と褒めるのも、ごく當然の歸結であろう。

同じことが聲律についてもいえる。四聲が詩作において重要な意味を有することはもちろんだが、それに拘泥して詩の内容が損なわれてしまうようでは、本末轉倒の結果になつてしまう。3「明四聲」では四聲の歴史を振り返り、南朝の周顒や劉繪の段階にあっては、「宮商は詩體に暢び、輕重低昂の節は、韻合して情高く、此れ未だ文格を損ねず」

と、聲律の意義が生かされていたのに、沈約が極度に四聲を重んずるようになって以来、凡庸な詩人たちがみなその風潮に迎合して、惡しき傾向を作り出してきたという。「沈休文酷だ八病を裁して、碎しく四聲を用い、故に風雅殆ど盡く。後の才子の、天機高からざるが、沈生の弊法の媚わす所と爲りて、懵然として流れに隨い、溺れて返らず」。

『文鏡秘府論』所收の『詩議』に、「律家の流は、拘みて忌多く、自然を失う、吾の常に病うる所なり」と慨嘆されるような當時の詩作における弊害の一つが、こうした形式的な四聲へのこだわりだったと認識されているのである。

このように、「自然」は皎然の詩學の根底を成す、『詩式』や『詩議』の基本理念といってもよいだろう。典故についての態度も、かかる自然さの尊重という大きな方針の中に位置づけて理解しなければならない。典故使用のありかたは、「詩有四深」に「用事は直ならず、義類に深きに由る」とあり、また「詩有四離」に「經史を用うと雖も、書生を離る」とあるように、ストレートな、單純な用いかたは強く否定される。「詩有五格」の第三「直用事格」は、その

皎然詩式の構造と理論（興膳）

ような工夫のない典故の用いかたをした詩を指している。それに對して、第二の「作用事格」とは、典故を用いていても、それが作者の創意によって詩中で有効に生かされているものをいう。「作用事」の語自體が皎然の造語であるらしく、分析すれば「作用」と「用事」の二語を壓縮して一つにしたものらしい。「作用」とは、元來佛語であり、本體的・根元的なはたらきを意味するが、「明作用」に「作者の措意は、聲律有りと雖も、作用を妨げず」とあるように、技法に拘束されない個性的なはたらきを指している。

「作用事格」に列せられる王粲「詠史」の「臨穴呼蒼天、淚下如綆縻」や、曹植「三良詩」の「秦穆先下世、三臣皆自殘」は、秦風「黃鳥」や『左傳』文公六年に見える秦の穆公の臣下子車氏の三兄弟の故事をもとにして作られたものだが、「二詩は體格高逸にして、才藻相隣ず」（『三良詩』）と皎然に評されており、典故を用いながらも、それに引きずられない獨自の個性を高く評價したものらしい。それに對して、最高の詩境を示す「不用事格」には、王粲「七哀」の「南登灞陵岸、回首望長安」が挙げられており、それに

續く結句には「悟彼下泉人、喟然傷心肝」があつて、實は曹風「下泉」の描く平和な世の到來を求めた人々のことを典據として踏まえているのだが、特にそのことは問題にされていない。「王仲宣七哀」の項に、沈約「宋書謝靈運傳論」のことはを借りて、「經史に傍らずして、胸臆を直率にするは、吾其の詩を知る者と許すなり。此くの如き流は、皆な名づけて上上逸品と爲す者なり」と最高の評價を與えられてゐるのは、典故を用いていても、それと感じさせない自然さが貫かれてゐるからである。

典故の使用の有無によつて詩句の格を品評するという發想は、遡ればやはり鍾嶸『詩品』に至り着く。感覺をこそ重んずべき詩において、知識をひけらかす典故は無用だというのが『詩品』の著者の主張であり、「君を思いて流水の如し」（徐幹「室詩」）、「高臺 悲風多し」（曹植「雜詩」）、「明月 積雪を照らす」（謝靈運「歲暮」）といった過去の名句をあげながら、「古今の勝語を觀るに、多くは補假に非ず、皆な直尋に由る」とまでいいきつてゐる。鍾嶸が典故の使用に否定的なのは、ひとえにそれが「情性を吟詠する」

ことを本質とする詩にとつてマイナスの効果をもたらすからである。皎然が『詩品』に關して、直接には一言も觸れていないが、このように檢討を重ねてみれば、彼がこの書から學んだものは決して少なくなつたようである。聲律に關して『詩品』が全面否定の態度に終始するのは、皎然の見解と一見大きく異なるようだが、それが自然な音聲の調和という主張から出たものであることを考慮すれば、皎然はその點でも鍾嶸に心情的な共感を寄せるところがあつたように思われてならない。

注

- ① 皎然の生卒は、賈晉華『皎然年譜』（一九九二年、廈門大學出版社）による。

- ② 序に「嘉靖辛酉孟夏吉旦金陵書坊家藏宋本重刊」とある。北京大學圖書館所藏の『吟窗雜錄』は、これと同一の版本と思われ、誤字まで含めて異同はほとんどないが、序には「嘉靖戊申孟夏吉旦崇文書堂家藏宋本重刊」とある。戊申は、嘉靖二十七年（一五四八）に當る。内閣文庫本は、おそらくその後刷本であろう。